

米倉二郎先輩を想う

本会名誉会員で1976・7年度には会長を勤められた米倉二郎氏が、2002年12月20日93歳の生涯を終えられた。同日未明たまたま停電中の暗やみに御自宅の階段から転落されたという事故であった。足が御不自由なのに、夜中のことなので家人を煩わせたくないという御配慮から、無理をなさったのではなかろうか。

米倉氏は1909年佐賀県上峯村に生まれられ、佐賀高等学校から京都帝国大学文学部史学科に進まれ地理学を専攻された。因みに筆者は同じ高校・大学を通じてのただ一人の後輩であるが、また同じ歴史地理学の道に進むことになったのも何かの因縁であろう。青木会長から紙碑執筆の依頼を受けた時は、教子に当たる広島大学出身の方が適任ではないかと一応は辞退したものの、編集委員会の意向ということでお引き受けしたが、委員会ではこのような事情をご存知だったのであろうか。

米倉氏の学問的業績と日本地理学史におけるその地位については、岡田俊裕氏『日本地理学史論－個人史的研究－』（古今書院）に詳細に論じられているので、ここでは不肖の後輩としての筆者の個人的感懐のみを述べることをお許し頂きたい。

氏は筆者にとっては学校でも学問の分野においても大先輩であったが、愚鈍な筆者とは違って学問の道ではエリートコースを歩まれた。高等学校には中学校4年終了で入学されたということは聞いていたが、中学にも小学校5年から入られたそうで、稀に見る秀才であられたのであろう。

佐賀県立三養基中学校は1920年に設置され、氏はその3回生として入学されたが、その初代校長が独自の教育を実践し、教員も全国から優秀な人材を集めており、地理には京都大学を卒業したばかりの伏見義夫氏が招か



(1998年3月28日 石井 寛 撮影)

れた。当時、地理学専攻のある大学は京大だけで、それまでの卒業生は14人しか居なかったから、田舎の中学がその卒業生を採用するということは、先ず希有のことであった。

当時の卒業生が中心になって作製した『前波校長と教師たち』（三養基高等学校同窓会）という本に伏見氏や米倉氏の文も載せられているが、同校は校長の方針として教科書は一切使用せず、逐一教員自製のプリントで授業を行ったという。米倉氏によれば、地理では一年生は先ず歩測で村の地図を作ることから始め、毎日放課後村中を歩き廻ったことであるが、授業は通論から始まり、河の話では淀川の河道変遷のプリントが配られたという。また、2年生は1泊2日で筑後川の実地見学をしている。

伏見氏は後に甲南高等学校(現、甲南大学)

に移られ、そこで人文地理学概論のテキストとして使用した Ellsworth Huntington の Principles of Human Geography を『人文地理学概論』(1926)として訳出され、当時唯一の人文地理学概説書として知られた。米倉氏は高等学校は理科であったが、結局大学は伏見氏と同じ京大文学部の地理に進まれたので、それには「中学1年で伏見先生に出合ったことが下地になったように思われる」と御自身が書いておられる。

米倉氏は1931年に京大を卒業され、1年間京大農学部農林工学教室の嘱託をなさった後、翌年文学部地理学教室の助手になられた。それからの5年間に条里を主体とする歴史地理学研究を次々と発表され、また東亜をフィールドとする調査にも出張されている。

1937年以降は和歌山商業高等学校講師から教授を勤められ、その間中華民国・満州国に出張調査し、1942年に山口高等商業学校教授に転勤された。さらに、太平洋戦争中には南方派遣軍総司令部参謀二課(後に兵要地誌班)調査要員として従軍され、フランス領インドシナ各地を調査されたが、終戦により1946年復員された。このように氏は大学卒業以来、常に学問の第一線に立ち、歳若くして教授に就任されるなど前途洋々たる御経歴であったが、戦後の1947年～51年は御家族の生活を支えなければならない時に、公職追放のため大変な御苦勞があったことと思われる。

筆者も復員してから高等学校に再入学し、さらに2年浪人して京大地理に入ったのは、旧制大学最後の1950年で、始めて先輩にお目にかかったのは最初の夏休みの時で、嘱託をしておられた佐賀県立図書館にお訪ねしてのことであった。当時、郷土研究の資料集を作製しておられたので、いくらかそのお手伝いをし、またその資料を吉田敬市助手(後に長崎大学教授)の水産地理学のレポート作製に利用させて頂いた。

その翌年公職追放が解除され、1952年に広

島大学文学部教授に就任されてからは、学会以外にはお目にかかる機会はなかったが、筆者自身は中学・高等学校の教員をしていて学会に出ることもままならない状態であった。筆者が国府の調査・研究をするようになったのは1963年以後のことであるが、米倉氏の学位論文であった『東亜の集落』(古今書院)は1960年に刊行されているので、当然必読の書になった。少しの暇を見付けて諸国の国府跡を見て廻ったが、国府は条里界線を基準に設置され、条里の方格を利用して国府条坊を設定したとする米倉説に疑問を抱くようになり、これに対する反論を書いた。筆者は1973年から大学に勤めるようになると、学会にも顔を出し、歴史地理学会の委員なども勤めることになった。

岡田俊裕氏著『地理学史—人物と論争—』に「国府論争」なる1章を設けてあるが、1988年の条里制研究会では会の指名で、米倉氏が1982年と1983年に発表された再論に対する反論を、同氏の面前で発表せざるを得ないことになったのは大変心苦しいことであった。

1997年5月17～19日に本会大会が佐賀大学を会場に開催された際、特別発表として「佐賀平野の歴史地理—故郷佐賀と私の地理学—」と題して発表された。氏が87歳の時で、御本人も最後の学会発表と考えられたのか、何人か御親戚の方も見えていた。その際、日野尚志氏と共に筆者の名前も挙げて頂いて恐縮したことを覚えている。

最後にお目にかかったのは、1999年8月の足利健亮君の葬儀の際であった。足が御不自由で杖をつき、お荷物は雑囊に入れて肩から掛けておられたが、帰路が心配だったので大島襄二氏と共に駅まで御供したが、30歳程も年下の後輩の葬式に遠路わざわざ出席された氏の律儀さが偲ばれる。

2000年は佐賀高等学校の創立80周年で、5月に記念式典があつて筆者も参加した。参加予定者に氏のお名前があがっており、最年長

者としての挨拶が予定されていたが、とうとうお見えにならなかった。かなり、身体が御不自由になっておられたのだろうが、その時にお会いできなかったのが心残りである。

御長男亜州夫氏（広島工業大学教授）からのお手紙によれば、氏は長年調査に出られたインドに対する思いを非常に強く持っておら

れたので、院号も天竺院とされ、また御次男がインド勤務の機会に、御遺灰を聖地ナシークに散骨してこられたということである。

本朝・唐・天竺に互って調査・研究を推進された大先輩を想い、謹んで追悼の意を表したい。

（木下 良）